

# いの流水俳壇

## 「当季雑詠」

外灯のぼや々と点る春愁ひ

友草 水月選

竹崎たかひろ

(評)外灯の点つている灯をみて心の華やきを覚えたがその反面、ふと哀愁を感じたのである。点っている外灯は眩しい程ではなく、また暗過ぎる程でもなく、ぼや々と点っているのを見ての繊細な感性である。「春愁」「春愁い」春のものの憂いの気分を言う。冬の寒さに堪え、春の声を聞き温かくなり冬の束縛から身体的に抜け出て、心も華やかに浮き立つがふと哀愁に襲われることがある。

○家具店の抽斗あまた春愁ひ

鷹羽 狩行

噛み合わせぬこともしばしば四温かな

津田 久美

(評)長年共に暮らしていても相手の気持ちが分かっていようで分かってなく、度々話が噛み合わず言い争いになる。歳を取つてくるとお互いに頑固になり、東と言えば西、上と言えば下と言う調子になるこのごろである。人生の機微をよく詠んでおり、また季語がよく生きている。

季語の「四温」とは「三寒四温」の略、冬は寒さが3日間連続と次の4日間は温かい日が来ると言うことで元来中国東北部の寒さに消長があると言う意味である。日本でも気流の関係で冬から春にかけて三寒四温の現象が起る。

○三寒四温赤ん坊泣いて肥るのみ

岡部六弥太

針持たぬ暮らしに忘る針供養

田蔦恵美子

(評)針仕事をしなくなつて針供養の日も忘れてしまったと言っている作者。昔は着物を縫い、破れを繕っていたが今は着物を縫ったり繕うこともほとんどなくなつた。針供養という言葉も廃れてしまった。

針供養は古い針や折れた針を豆腐や蒟蒻に刺して感謝や針仕事の上達を願う風習で、関東では2月8日、関西では12月8日となっている。高知では毎年高知八幡宮で行われている。

○女の宮の雨しづかなる針供養

服取よね子

少しだけ遠出してみる春立つ日

岡村 嘉夫

(評)今年の立春の日は普段の散歩より少し距離を伸ばしたと言っているので。素直に率直に詠んでいる。

立春と言うと感覚的にも春を感じ少し温かいと思ひ愉快である。日ごろから運動不足を解消するのも丁度良いではないかと思う気持ちが出てくる。「季語」の春立つ日は「立春」のことで、陰暦では一年を24の気に分けて四季の変わり目の春は立春、夏は立夏、秋は立秋、冬は立冬と言ひそれぞれ季節の分かれ目を節分と言ひ、節分の翌日が立春である。

○万燈のまたたき合ひて春立てり

沢木 欣一

二句抄

夫の星探す今宵の冬銀河

刈谷 志津

風と行くマフラーに顔濡れさせ

山里に日射し集むる福寿草

小野川町子

何となく離れづらきや春炬燵

立春の七十路遠出軽やかに

森岡 照月

蛙焼いて炎にたくす米づくり

飛行機雲真一文字に冬を切り

大川 節弥

鬼やらい泣く見笑う見豆打つ見

鬼遠く遠くに居れと豆を撒く

國田 貞子

山一つ消して吹雪の迫りおり

岩しづき二つ三つと露の臺

片岡 包女

紅梅を待つとの友の良き便り

歩を止めて花鉢選ぶ四温晴

川村 博子

八十路また年を重ねて豆を撒く

探し物探しあぐねて寒ひと日

田蔦恵美子

夢のない男がもう愛のチヨ

日脚伸ぶ犬は日向の匂いして

竹崎たかひろ

水温む跳ねる魚の清々し

立春の日射しの届く厨窓

津田 久美

襟を立てバス停に待つ冬帽子

芭蕉の句碑

岡村 嘉夫

春の夜は桜に明けてしまいきり

この句は琴平神社(いの町新町電車終点のすぐそば)の句碑の庭にある芭蕉の句です。桜の花見の宴で気が付くと夜が明けてしまったと言っています。この句碑は嘉永5年(1852年)に当時の俳諧有志が建立したもので、明治維新の15年前の世の中が騒然としたとき、いのに静かに暮らす俳人がおり文教の地にささわしい文化が咲いていたのです。

芭蕉の句碑は北は北海道から南は鹿児島まで全国2230基あり、その内、高知県には29基あります。

名句鑑賞としこの2年間に20句余りご紹介しました。俳聖と呼ばれる芭蕉の句は350年も昔に詠まれたものですが今も燦然と輝いているのです。(終)

次 題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月5日

投句先

教育委員会事務局

いの町3597 画 89312012

有料広告

医療法人 森木病院  
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内科  
外科  
小児科  
循環器内科  
消化器内科  
リハビリテーション科  
人工透析